

## 桑名百姓騒動風説書

山 中 雅 子

### 「桑名藩文政一揆」をとりまく史料

昨年「鈴鹿国際大学紀要」(2004 No.11)において「桑名藩文政一揆について」を執筆した際、複数の史料を使用した旨を記した。これらの史料の閲覧状況は次のとおりである。「鶯宿雑記」書抜の写本と思われる「文政六年桑名騒動記 全」は桑名市蔵伊東富太郎家文書として閲覧が可能である。また、「文政一揆録 全」は個人所蔵の写本であるが、桑名市中央公民館講座「近世文書を読む」のテキストとして使用されたため、すでに翻刻済みである。また、表紙部分がかすれ判読できなかったため、便宜上「久松松平家文書」と呼称していた史料は、桑名中央図書館において史料標題「(文政六年国替記)」として、同図書館のデジタル化資料で提供されている。公開されていない史料群としては、『浮き沈み或る武士の生涯』(小川八千代著)で語られている松平下総守家家老家史料(個人蔵)である。そして、今回翻刻として掲載した「桑名百姓騒動風説書」も一般公開されていない個人所蔵(亀山市)の史料である。

「桑名百姓騒動風説書」は以前、「多度町史」編纂過程で当史料のデジタル撮影を行ったときの画像を使用して翻刻を行った。この史料が近世百姓一揆を解明する手がかりのひとつとなることを祈りたい。

### 「桑名百姓騒動風説書」解題

「桑名百姓騒動風説書」は表題をそのまま標題としており、亀山藩の史料群に存したものである。その内容は、文政6(1823)年桑名藩に起こった一揆の原因とその経緯・結果を亀山藩に報告する目的で作成されたと考えられるが、この史料に報告者、あるいは採録者の署名はない。したがって、この史料は報告書の複本であるか、単なる記録書であるかという判断はできない。だが、「桑名百姓騒動風説書」は近隣藩の一揆に際して、亀山藩が加勢に赴いた事実の真相を明らかにするとともに、亀山藩において同様の問題が生じたときの事例研究の題材として蓄積された記録であることは言うまでもない。また、「桑名百姓騒動風説書」の情報は、「文政一揆録 全」のような地方史料と比較すると、一揆の動きよりも藩・代官所側の行動が詳細に描かれ、記述内容も下記のように整理された体裁をとっていることから組織的立場にある人物、つまり亀山藩の役人によって調査・採録されたものと私は推断している。

「桑名百姓騒動風説書」は73丁からなる縦帳である。内容的に2つに大別できる。まず、前半部は一揆の発端から終息にいたる経緯、後半部は一揆終息後の村々への聞き合わせである。各部をもう少し詳細に記すならば、前半部は一揆前の8月2日から、一揆終息後の同月24日に桑名藩用人・代官が農民を呼び出し一揆の無益さを論ず旨の仰出しをするあたりまでを記した36丁目までを一応の区切りとできる。この中には一揆の発端、打ち壊しや桑名藩役人を挑発する一揆の様相、一揆を食い止め城下へ入れまいとする桑名藩の動き、加勢で桑名藩へ出張った笠松代官所や近隣藩の辻固めの様子・折衝などが採録されている。後半部は37丁目以降で、記述の中心は一揆終息後の8月末から9月にかけての書簡

の写しや廻村の報告書などである。ここには亀山藩役人伊藤十右衛門・中田紋兵衛・鈴江四郎右衛門らが村々を巡回して得た情報のほか、津藩地方役人から得た情報などが収録されているが、一揆終息後の処理に関連する事柄が中心である。それは、静謐となった村の様子や新たな結党を憂慮させる情報の精査・聞き合わせ、桑名藩役人立会いのもとでの笠松代官手代と農民の交渉、桑名領分村々聞き合わせによる一揆発端の再検証、打ち壊しを受けた庄屋達からの一揆原因究明の歎願などが収められている。

当史料は前半部において、同じ料紙を用いていると思われる。しかし、前半部32～36丁の「八月廿四日 壹村ニ而四五人宛百姓御呼出し、一郡ニ而両三ヶ所江出張ニ而御用人奥平織右衛門殿・御代官石沢弥一兵衛殿被仰出之写」の4丁分と後半部57丁目の「覚（未9月5日津藩坂倉弥左衛門北筋聞き合わせにつき）」以降の料紙は天地のみが前半部分の料紙より少々短い。また、58丁目に「津御領小目付坂倉弥左衛門并森田七三郎と津御役所江注進口上書、大庄屋森田源七方ニ而内々借候而写取」という記述から、津（藤堂）藩玉垣村大庄屋森田源七から借用して写し取った情報がある。森田源七所持の注進口上書を借用したのは亀山藩の者であろうと思われるが、「桑名百姓騒動風説書」後半部の記述は津藩が収集した情報からなることが伺える。したがって、57丁目以降の記述は別に作成され、のちに一冊に綴じ込まれた可能性もある。さらに、最終丁にこの帳面を作成する字配りに用いたと思われる下敷きが挟まれている。文字は本文と注釈に使われたやや小さな文字が使われているが、本文のみをこの下敷きの字配りで配置すると頁7行となる。前半部において料紙丈の短い32丁目からの4丁、ほかに1～2丁程はこのスケールに当てはまらない頁はあるものの概ね頁7行で収まっている。これに対して、57丁目以降の頁はこのスケールに収まらない。以上からも57丁目以降の記述が別に作成されたか、あるいは添付されたのち1冊に綴じられた可能性を裏付けるように思われる。

以上から、「桑名百姓騒動風説書」は署名はないものの、亀山藩の役人によって採録されたものと思われるが、その編輯にあたり津藩収集の情報については料紙の形状からみて、別に作成したか、あとから添付して一冊に綴じ込んだものと考えられる。

### 「桑名藩文政一揆」概略

「桑名百姓騒動風説書」のみからでは、一揆の発端から終息の時間的な推移は多少わかりにくいので、諸資料に語られている記述を交えて一揆のあらましを示したい。

文政6（1823）年8月に起こった「桑名藩文政一揆」は、講掛金の返還をめぐる事件である。桑名藩はかねてから「助成講（成精講）」という講を開講しており、領内の農民らはこれに加入し掛金を納めていた。そこへ同年3月、幕府は桑名藩主松平下総守家に対し、現在領知する伊勢国桑名から武蔵国忍への国替を命じた。藩主の国替によって講掛金の返還に不安を抱いた農民らは講加入を勧めた地方役人らに講掛金の返還を要求したが埒がかず、8月2日頃より領民たちは群れ集まり、桑名城下の役所へ講掛金返還の訴願に詰めかけた。城下ではこのような農民が日増しに増えてきたため、藩側は農民らと交渉の用意をすすめながら一揆の蜂起に備えた。そして、ついに8月6日から7日にかけて領内各地で打壊しが始まり、一揆へと展開した。武装した農民らは、勢いに乗じて近隣村々の地方役人宅を襲撃した。この一揆を鎮静に導いたのは、本願寺御坊輪番の寺僧、笠松役所及び桑名藩郡奉行らの説諭であった。笠松役所代官は町屋川原で農民の訴願を聞届る旨を約束したため一揆は解体していった。また、領主側は召捕らえた農民に因果を含めて開放し一揆を内部から鎮めるという手段も模索し、これも功を奏したようである。

一揆終息後、国替は無事完了し入封してきた松平越中守家と、かつての領分の一部を忍領として残し国替した松平下総守家との立会によって一揆に関わる吟味が行われ、3名が死罪となった。また、笠松役所によって「聞届」を約束された要求の多くは叶えられなかった。

文政6年桑名藩助成講掛金返還をめぐる一揆は、構図としては複雑なものではないが、官僚側の一揆をとりまく情報の収集方法は巧みであり、一揆終息後迅速に一揆頭目を捕縛している。また、事後処理は各々の職掌を侵すことなく極めて政治的な決着がなされている。

「桑名百姓騒動風説書」では、一揆の頭目と思しき人物の行動や町屋川原における笠松役所出役との

交渉、また、一揆後、巡回役人らの聞き合わせに対し、各村々は静謐を強調するあたりの記述などが読みどころである。

## 凡 例

史料を翻刻するにあたり、でき得る限り原文書の形に沿うよう努めたが原史料の意味を損なわない程度において次のように改めた。

一史料を読みやすくするため、読点（、）、並列点（・）を適宜施した。

一漢字は原則として常用漢字を使用し、俗字・異体字・略字などは正字に改めた。但し、近世の雰囲気伝える字として「躰（体）」「紮（糾）」「扣（控）」、接続詞の「并（並）」はそのまま残した。

一変体仮名は平仮名に改め、片仮名はそのまま表記した。また、助詞として用いられた「江」「而」、合字の「𠂔（より）」もそのまま生かした。

一当時慣用された語句「利解（理解）」「利足（利息）」などの表現には注記を付していない。

一踊り字について、漢字一字の場合は「々」、平仮名・片仮名各一字の場合はそれぞれ「ゝ」「ゝ」、語句の場合は「々々」を用いた。

一判読不能の箇所について、字数が推定できる場合には□、字数不明の場合には〔 〕で示した。

一校訂者による注記はすべて（ ）で示した。

一平出は二文字分、闕字は一文字分あけて示した。

## 史料本文

「 文政六癸未年八月

桑名百姓騒動風説書

八月六日と同十一日迄 』

一桑名領騒動之発端は、此度忍表江御所替被仰付候処、成精講金割戻し願之儀ニ付騒動ニ及び候与相聞候、最初ハ八月二日頃ニ町屋川原江大勢集り、夫と同日頃より簀笠ニ而大勢立連レ桑名御城下江出何歎願筋有之様子ニ付嗽訴ニ而も可有之間何事を願ひ候哉承紮、御城下ニ大勢差置候儀不相成利解申聞取鎮可申旨代官拾人内御譜代代官三人・郷代官七人之者江申付有之、何れも出役、桑名と西江一里計百姓共為開段々鎮り候之様申鎮候得共、成精講之事百姓共口々ニ申立、同六日迄互ニ申争ひ居候内、一方こぼち懸候ニ付代官も無是非引取候由、此節御役人も罷出取鎮候得共不聞入石礫打候ニ付無抛引取候由

奉行役川上市右衛門市 右衛門敷或ハ善右衛門敷名不分 取鎮出候処、百姓共取巻石打候間、命から々々逃歸り候処、御家中之面々寄合居、何分ニも川上罷出取鎮候様皆々ハ川上を責立候故、無抛又々鎮ニ出候得共百姓共石ヲ打、不寄附又候命から々々逃歸り候由、外之役人出候得ハ百姓共上ノ役人ハ恐レ候由ニ而、皆々逃散り候ニ付役人も致方無之由

一此度騒動発起之村方ハ、石榑三郷ハ事を起し候様申候得共しかと不相分

一成精講ハ取退講ニ而五千口有之、拾ヶ年程前ハ初り此節大方年限も立候得共、未滿講ニ不相成候処、御所替被仰付候ニ付被成方無之、此度元金利金ニ可有之一口ニ付拾三匁宛之御足し金ニ而、千両余元利江御足し割り渡し被仰付候由

桑名領二百ヶ村程之村方江、成精講懸金村毎軒別江金壹歩位<sup>(分)</sup>之懸金ニ而講会相結有之、此度御下ヶ金六千両と敷六万両と敷申候、しかと不相分、割渡し金軒別滿講ニ候得ハ四両三步宛之由ニ候得共、此度三両三步宛割渡しニ相成候之由、是ハ未滿講ニ無之候故、員数少ク候得共其儀百姓共不納得と相見へ願出、騒立候事之由、一説ニハ右割渡金之内、庄屋・代官相談之上、後年之手当テと称し預り置有之ニ付、百姓一統腹ヲ立、騒動と及ひ候とも申候、何分取鎮と而役人出張候得ハ、最初ハ上江対し御恨無之、願筋も無之と申、百姓ちり々々ニ逃退キ手ニ合不申と相聞候事

一桑名表は当月六日江戸より飛脚来り、忍御城請取之一番手同十七日可致発足、夫ハ追々出立いたし可申、御城請取渡しハ九月廿八日と御治定之趣申来り、御家中一同上ヲ下江と返し候所、同夜中より百姓共所々打崩し懸り候ニ付、誠ニ混雜ニ而諸物頭ハ御所替故しぶき置候弓・鉄矢・玉薬等取出し組子ニ為持固メニ出、諸士も初ハ家来ニ鎗為持出候得共、九日之夜頃よりハ自身鎗引提、固メ場所江出候よし見請歸り候ものも有之候

一此度之騒動石榑ハ初り候と見へ石榑三郷之庄屋は壊チ不申候よし

八月六日ハ同七日セツ時迄壊チ候村々、左之通

朝明郡之内

同

永井村庄屋

南大社村庄屋

六郎兵衛

太郎兵衛

同

同家 太左衛門

保々郷之内

同

市場村庄屋

中上村庄屋

丈左衛門

伝之右衛門

員弁郡之内

丹生川西村庄屋

才市

同	長深村庄屋	同	右同郷
	専左衛門		門前村庄屋
	甲		彦四郎
乙		同	
同	北大社村庄屋		同金井村庄屋
	弥四郎		源七
同		同	
	梅戸本村庄屋		大井田村庄屋
	弥左衛門		平八

同七日八ッ時と八日朝迄こぼち候村々、左之通

朝明郡豊田村庄屋	口
伝四郎	同 北村庄屋
同 乗坂村庄屋	甚五郎
林助	同 茂福村庄屋
同 鵜村庄屋	金兵衛
平五郎	同 羽津村庄屋
同 西富田村庄屋	伝左衛門
吉兵衛	右同村年寄宅
同 高松村庄屋	式軒
茂兵衛	同 別名村庄屋
同 富田一色村庄屋	長右衛門
善四郎	
同 富田村庄屋	
金四郎	
右同村茶屋	
大野屋栄助	

イ

同八日と九日朝迄こぼち候村々、左之通

員弁郡高柳村庄屋	壺軒	同 埋縄村庄屋	壺軒
同 楚原村庄屋	壺軒	同 口村庄屋	壺軒
同 大泉村庄屋	壺軒	同 富田村浜庄屋	壺軒
同 阿下喜村庄屋	壺軒	同 東富田村年寄	壺軒
同 大木村庄屋	壺軒	同 八幡村庄屋	壺軒
朝明郡西大鐘村庄屋	壺軒	同 大矢知村庄屋	壺軒
同 萱生村庄屋	壺軒	同 下ノ宮村庄屋	壺軒
同 中村庄屋	壺軒	同 川北村庄屋	壺軒
同 伊坂村庄屋	壺軒	同 山堀村庄屋	壺軒
右は外村庄屋兼帯ニ御座候		同 小牧村之内	壺軒
同 山村庄屋	壺軒	札場村庄屋	壺軒
同 広永村庄屋	壺軒		
同 右村新田庄屋	壺軒		

## イ

一此度騒動之者共七手ニ別れ

金銀之采、右は太鞆・鐘・貝<sup>(数)</sup>ニ而人数進退之相図を定メ、金之采をふれハ領主役人出候合図ニ付引退へしと、銀之采をふれハ家をこぼつべし太鞆ハ粮米之相図杯と申合、白髪あたま之老人采をふり、或は貝組、又は太鞆組と相別、所々打崩し歩行候之よし

三重郡一手      朝明郡二手      員弁郡二手

此手は昼ハ宮山ニ籠り、所々庄屋・其外富家杯江焼出し酒等申付、夜々出テ所々をこぼち惣人数之内、鋸数多持ち居家之柱根を引切、柱不残引き候得ハ貝を吹テ相図をいたし縄ニ而其家を一時ニ引倒シ候よし

多度の方二手

都合七手

右之内三重郡・朝明郡之手は

山田造酒介

并町奉行

出張八日之夜取鎮候由、大躰穩ニ相見へ候之處、

一町奉行謀ニ而最前ニ生捕置候百姓五六人、生捕を免し何願ひニ而も可聞届間、鎮り候之様可呼と申含放シ遣し、是ニ而一旦は鎮り候よし

一最初ニ二百人程御城下江出訴いたし候百姓之内、頭取とも見へ候百姓五六人生捕、牢舎申付有之、右五六人之百姓ニ牢舎免し遣シ候間、惣百姓江鎮り候様申聞せ取鎮メ候得と申含候之處、右五六人之百姓、此度出訴之儀ニ付存念取極メ罷出候之上ハ命助り候了簡更ニ無之、たとへ命ニ拘り候共不相厭取鎮メ候義ハ思ひも寄らすと申切り断候得共、頭取之穿儀無之候間、是非共参り取鎮メ可申と被申付、右五六人之百姓左ニ候ハ、一応可申鎮と答へ大勢之中へ入り、触廻シ大方取鎮メ候よし是ニ而朝明郡之手ハ引候哉之事

同九日四ツ時頃十四川原江三重郡組之内、鵜・大矢知・下ノ宮・吉沢、右村々、員弁之郡ノ手押寄せ参り候等と申立寄集り候ニ付、富田村より町奉行所江注進申出候ニ付町奉行早馬ニ而右場所江出張之所、百姓共逃走し申候

一躰此度之騒動、上之役人と申候得は百姓共退レちり役人出候得ハ引退候よし、然れとも引懸ニ矢張外々崩し候由

依之十日ニハ三重郡組・朝明郡下組は出不申候

一桑名郡・員弁郡村々庄屋宅ハ、奥ノ方方段々打崩し段々御城下近ク江参り申候 奥筋は中々忍ひニ而も難参候よし、七里も有之 睨と不相分候得共勢ひ強、十日曉桑名郡香取村庄屋之宅こぼち懸候処江、御用人・物頭立入候ニ付半潰しニ而山江逃退候間、桑名御役人引取候処、隣村中津村庄屋を打こぼし又香取庄屋江も潰し夫方員弁郡

芳ヶ崎村庄屋

五反田村庄屋

瀬古泉村庄屋

森忠村庄屋

右を打潰し申候

員弁郡之手は

志知村庄屋

友村庄屋

境村庄屋

金井村庄屋

右を潰し、其晩繩生村移り候様子之よし

一桑名諸役人中出張は

江場村

繩生村

糠田村

東方村

深谷辺村

右何れも鉄炮切火縄ニ而出役

此度百姓共目差候江場村代官水谷佐太郎は、御所替ニ付忍江御供ニ而引越、弟江跡式譲り候願ひを百姓にくみ、是非打崩へくと申触候へとも此固メニ而難をのがれ候よし、此外ニも田口新田代官鈴木宇兵衛、八王子代官豊田定助も桑名之固メニ而難をのかれ、其外四人ハ打崩され候よし

鉄炮五拾挺  
一御城下三崎門  
鎗十筋計

右ならへ有之、諸役人相詰御城下江押寄候ハ、打捨候用意之由

此外見附々々も鉄炮切火縄・鎗等ニ而、諸役人相固メ居候様子見請来り候者有之候事  
一八月十日朝と午刻江向

一三重郡上ノ山手 福松村庄屋

桑部	東金井	西金井	北山	稗田	亀洲	蓮花寺
縄生	東新田	東ゆり上ケ	西ゆり上ケ	深谷辺		

此分は残り候哉、駈と不相分

御城下と廿四五丁隔候村之凡人数貳万人計押寄せ、右村々江出役も有之候得共、手ニ不合引取候由、依之

桑名

両本願寺御坊輪番

法盛寺 本統寺

人数集り居候町屋川原江罷出取扱候様子相聞申候、但シ百姓共聞入不申候由

一大鐘村庄屋ハ名は弥左衛門と承り候元来より指折之金持ニ而油屋之由并才木等数ヶ所之土蔵江詰籠有之、右之土蔵へ百姓共入込、油も諸道具も残らず取出シ表ノ広場江積ミ上ケ火を懸、焼払ひ、己れが所之金も是程ニセズバへるまひと百姓一同申候所、亭主出、来年今頃来テ見よ此通りにして為見ると答へ候由

一何方之庄屋か能竹藪を持居、諸道具を其藪江隠し置候処、百姓共聞付、此竹藪が有ゆへ道具を隠候といふて片端と竹藪を切払候之由

一何方之村ニか米百俵焚出シ、送り酒七拾石出し候而難をのがれ候由、ヶ様之類多く拾俵・貳拾俵焚出シ致し候之上、打崩され候も有之、又質屋ニ而米拾俵持参り候得共百姓共参り質物不残打崩し候由

一何方之庄屋か打崩し候節、殊之外結構之太鞆有之、雨ふりニも不構能鳴候太鞆ニ而、金拾三両程出し庄屋調へ置候由、右太鞆を百姓共押取、相図之太鞆ニ用ひ引取候節右太鞆を打割候之由

一保々村之庄屋之由、百姓共其庄屋を召捕、講金之訳相尋候得共中々是を不明候ニ付、庄屋をしばり上ケたる木へつり松葉いぶし致候付、庄屋くるしミニたへかね講金之義白状いたし候由、講金之御下ケ金貳千両四郡之庄屋四人持之、御所替ニ付御日延之願ひとして江戸江出、下総守様御屋敷江参り御日延之儀願度と申立候得共、左之儀御願は成兼候ニ付御取上ケ無之と申事ゆへ松平越中守様御方へ参り右貳千両ニ而越中守様御方々役人江賄賂いたし、此度御所替之儀申立、村々庄屋共御引替之上不相替庄屋役被仰付御譜代ニ被成下候様相願ひ候之段白状いたし候間、百姓共弥腹を立、庄屋皆々打崩シ候由



但シ越中守様ニ而も御取上ケ無之、庄屋申付候儀ハ下総守様御挨拶も無之義ニ付難取上、右躰之義相願候事不届之由ニ而右庄屋四人御差留牢舎被仰付候と申尊也ニ付不帰来、夫と段々姦曲相顕シ候と申沙汰也、又講金下ケ金之節三重・朝明・員弁・桑名四郡之庄屋之内四人内密ニ而加藤太郎左衛門・川上善右衛門前江呼出し、何躰之姦曲工事及密談ニ候哉、口外不出申合ニ而互ニ血判取かわせ及密談候事有之由、保々村之庄屋此内談之内と申事也

一富田村茶屋ハ百姓共大勢参り酒吞せ候様申候所、酒は売切り候と申候ニ付打崩シ候由

一右変事ニ付、美濃笠松御代官松下内匠殿手代桑名表江出張、八月十二日桑名江着也

御所替被仰付候得は双方御引替相済候迄之内ハ、其領地双方共最寄御代官取扱之由申沙汰也、下総守様御頼ハ無之と尊有之候

此度騒動も百姓方御領主御引替無之内ニ代官・庄屋江恨をはらし候と申立候由

一両鵜村氏神社内江村方之者共寄集り、西山手之村々も追々罷出、東筋を潰し、夫と八王子代官を潰し楠六郷江参り可申と申触候由

八王子辺ハ津・亀山・久居三領打越へ入込候村方ニ而、右三領固メ出有之、右固メを恐れ不入込、楠六郷ハ四日市宿通らすし而難参村方ニ而四日市宿ハ、御代官多羅尾靱負殿手代口々持固メ旅人之外ハ宿内江不入候ニ付、富田林ハ船ニ而楠辺江押寄せ候由ニ候得共笠松ハ出役ニ付不参候よし

同十一日

朝明郡・員弁郡村々百姓共一手ニ成大勢ニ而、朝明郡福崎村郷代官宅打崩し可申積りニ而町屋川原江押寄せ押懸行候処、笠松役所ハ出役ニ而願之趣聞届候間引取候様達し有之、何も同大声ニ而難有奉畏旨請答致し、所持道具類川原ニ而打砕キ引取候よし

右願之筋何も無之、御領主江恨も無之、惣百姓存寄有之如斯候、今両三軒打崩シ不申残念之由申、山田彦左衛門もこぼち候之積と申候由風説有之、又頭取ハ誰ニ候哉ト相尋候得ハ、頭取は成精講ニ而外ニ頭取無之と答候とも申候、又頭取之御吟味無之様第一之御願ひニ候と答、亦ハ頭取ハ何某ニ候と答候ニ付、名印ニは不及口書差出候様申達候得は、名印無之口書ハ断之趣答へ候とも申まち々々之沙汰也、

一三崎門固メは侍三拾人、足輕五拾人、惣人数百人計出居候由、其脇ニ牢屋有之、最初ニ生捕候百姓七人、右之所ニ牢舎いたし居候付、此手江来り候三手之百姓一緒ニ成、右牢を打破り七人之百姓を助ケ可申と申合セ候取沙汰忍ひ之者申来候ニ付、此手は嚴敷相固メ居候而、其内ニ七人之百姓江段々利解申聞取鎮メ之儀申付候処、七人之百姓悦ひ候而早速所々駆廻り申鎮メ候よし、二日目ニ七人之内三人立帰り、最早拾壺ヶ村為引取候、跡も追々為引可申と告来り、是より段々引口付キ候よし

一日野谷四ヶ村江は為固メ、桑名ハ物頭三浦順之進鉄炮七挺、惣同勢三拾人計八王子村江入

込、郷代官豊田定助宅相固メ段々手配り之様子ニ付、亭主定助右御手配りニ而百姓共御打払被成候之儀哉ト相尋候処、此家江手を掛候得は百姓共不残打取候と答へ有之故、亭主大ニ致迷惑、私宅之儀ニ而百姓共式拾人も三拾人も御打捨被下候而は右之汚名末代ニ伝り私子孫何計か迷惑之段相断候得共、此所之固メとして上之命を蒙り相詰候義此家江手を懸候を見物いたし居候而ハ我等役筋不相立、其節ハ不及是非打捨ると申、亭主之断、決而不致頓着、亭主甚た困り居候之处日野谷江ハ百姓共も不寄来候之由

八王子村も桑名郡・員弁郡・朝明郡之百姓共ハ是非共ニ可致参会、其辺之庄屋・代官おも一緒ニ打崩し可申と申越し、万一不致同心候ハ、其村々不残焼払可申と申触候付、大ニ恐れ日野谷四ヶ村追々寄集り候処江、八王子村代官桑名ハ歸り来候ニ付寄合候百姓引取候之よし、右代官も被打崩候風説ニ付諸道具片付、村之百姓ハ追々参り手伝諸道具預り参り候百姓も有之处、翌日ニ成、右道具預り候得は其預り主之家も打崩し候と申沙汰をそれ、右道具類代官宅江持来り差戻し候ニ付、一村之百姓迄右様之躰ニ成候而は迎も道具は被打崩候事ニ付、取納候も無益なり其所ニ捨置と申、門前ニ積置有之候処其内ニ桑名ハ固メ参り無事ニ相済候よし

一日野谷四ヶ村は先年桑名領騒動之節も不参会、此度も不同心ニ付三郡之方ハ嚴敷おとし懸候ニ付而兎哉角と申居、津・亀山領固メ之事を仰山ニ申立、津ハ之御固メ鉄炮五拾挺、亀山ハも川島村江鉄炮五拾挺、人数夥敷御固メ出、騒々敷もの共通候得ハ不残打捨ると申様子ニ候旨申触候ニ付、津・亀山・久居之固メをおそれ日野谷江ハ不入来候由

一此度下総守様ハ御届は旧領百姓共騒動と申御届ニ而、万事共笠松御代官所松下内匠殿御裁許ニ相成候由

一此度桑名領百姓騒動ニ付

御家老御政事方兼帯

(加藤太郎左衛門  
右御役御免

(郷代官七人  
役御免

奉行役

(川上善右衛門  
同断

外ニ

(御譜代々官三人  
其儘之由

一笠松御代官所 手代中四人

右羽津村江出役、日野谷四ヶ村、近村六七ヶ村村役人之内壺人付添、村方惣代として頭百姓六七人被呼出、此度当領騒動ニ付罷出候哉不出候哉又は右騒動ニ一統同心いたし候哉尋ニ而、夫々利解之上願之筋有之候ハ、可承置と演説御座候処、百姓共願立候は

一成精講一統江三両三步宛御割渡し之处、四両三步宛之御割渡被成下候之様

一米金拝借之分式歩五厘は上納可仕候間七分五厘は御用捨被成下候之様

一社倉米拝借之分は不残御用捨被成下候様

一御領分之庄屋役廻りニ被成下候様

右之趣百姓共願立候由ニ而手代中利解、願之趣至極尤候得共、左様之事可相成もの哉、其方共身ニ取、篤と勘弁可致可請取品は充分ニ受取、拝借之分ハ可成丈御用捨と申立候而ハ、此度領主も所替と申、行届申間敷と存候、併領主江其趣相通し可申候得共能其方共も勘弁致し候様品々利解御座候由、右之趣達し御座候而夫々朝明江二手ニ成相廻、右廻り之村々は何レも騒動ニ出候村方故一通り吟味同様之利解も厳敷御座候由

ノ

津出役

口

川原田村詰

山ノ一色村詰

郡奉行

福山六蔵

大庄屋

大庄屋

川北清右衛門

篠原久右衛門

同

同

山田藤左衛門

森田源七

小目付

小目付

井早平十郎

久世長右衛門

同

右は松本村掛持之由

坂倉弥左衛門

吟味役壱人

吟味役三人

寺方村詰

右は八月六日頃より同十四日迄相詰、津表

郷代官

福喜多平駄兵衛

江引取之由

ノ

イ

久居出役

尾平村詰

代官

橋爪源太郎

郷目付

吉田九郎右衛門

小目付

石井九兵衛

大庄屋

信藤勘大夫

右八月九日頃より同十四日迄相詰、久居江引取之由

一亀山より川島村江伊藤十右衛門并郷廻り小目付并足輕六人八月八日夜より罷越ス、同十日中田紋兵衛并郷廻り小目付足輕六人波本村江罷越ス、同日代官加役鈴江四郎右衛門并郷廻り小目付若松村江罷越ス、右同十一日・十二日引取候事

一日野谷四ヶ村、其外楠六郷、其余ニ而村方式万石程之村々江桑名郡代打廻り、此度御所替之處騒動之次第御上御恥辱ニも相成候、一同何と相心得候哉之旨尋有之候之處、右之村々江申候は此度之次第御上江対し立入候事ニ御座候、御恥辱奉雪候儀ハ村方存寄りも有之申談居候と答候而、愈々願筋之内江右村々此上不相替忍御領分ニ被成下度、此儀不相叶候ハ、右之村々江百姓三四人ツ、忍江御供仕御恩相報申度旨笠松・桑名双方江願ひ、双方共神妙之儀ニ候得共両方江願書出シ候ニハ不及、忝ヶ所ニ而宜と申事ニ而、桑名之方願書差戻相成、笠松江出候由風説之事

一廿日頃迄村方ニ寄りいまた寄り合居候村も有之由

一騒動相始り候否、江戸江式拾四時之早飛脚数度出、相鎮り候否、御家老山田典膳、五日・六日之道中ニ而出府之由

一加藤太郎左衛門父子并川上善右衛門御役被召上、閉門被仰付候得共未御裁許ハ無之、典膳帰着之上と申沙汰ニ而いつれも山田造酒介宅ニ而申渡候由

川上は退役之上、拾人扶持ニ被仰付候由

一江戸江三日限之早便り来り山田半右衛門再勤被仰付候、是は御家中一同之願ニ而、此再勤願ひ不相叶候ハ、一統御暇可被下と申立候由沙汰ニ候得共、未半右衛門再勤不被仰付候由、然れ共御家中一統之願ひ上江もれ聞へ候哉、此間親類対面御免被仰付候由、定て再勤被仰付候思召ニも可有之、再勤之義は典膳帰国之上、再勤ニ可相成と申候趣之由、彼地沙汰申来候事八月廿四日江

忝村ニ而四五人宛百姓御呼出し、一郡ニ而両三ヶ所江出張ニ而御用人奥平織右衛門殿・御代官石沢弥一兵衛殿被仰出之写

其方共事、此度助成講割合之儀ニ付庄屋共私欲有之様疑心相立、其筋江願出候者も有之、御代官ニ而利害申聞候得共一鉢庄屋金子引書有之様申唱候者も有之候ニ付、中々以難拝、右之處遺恨ニ存大勢連中を催し村々庄屋宅をこわし候之様〔<sup>(虫損)</sup>〕付願之趣承候様御役人夫々出張被仰付如何相心得候哉、願之筋も不申出たむろいたし居候処江参り候得は忽チ逃散候ニ付、此方〔<sup>(虫損)</sup>〕聞セ出来不申、甚以残念なる事候、其節利解も承り候得は各別大造ニハ相成間敷存候、算合を初不審なる事有之ハ穩便ニ幾応も可申出事候、若理非不相糺不取上節ハ我々共申出候ハ、納得出来候場江も至り可申処、其儀も無之、右之次第及候は呉々も残念之事ニ候、扱此度御所替ニ付而ハ万事御慎深く物毎穩便ニ御取扱、別而御領民之處ハ百年來之御因ミ有之事故、御愛情深く既ニ不埒筋ニ而御咎メ有之者共も一段二段も御赦免被仰付候御振合ニ而、尤下も御所替を相歎キ御永城、又は御日延之儀ハ一統ニ相願、他国迄も相響き、皆々涙ニむせひ候次第ニ有之候、是等ハ全く常々御取扱も御手厚有之候故之儀と申者ニ而御首尾合も宜可有之と恐悦安心致し候処、右之振替へ此度之次第、誠ニ浅間敷事ニ而言語絶候、勿論上江之愁ミは無之とも申分ハ先々宜候得共、初メニも申聞候通り御時節柄之儀故、別而上ニも御心配被為在候処、御領分一鉢ニ騒々敷近国御大名様方固メ御役人御人数被差出、遠国迄も尾緒を附大

造ニ申し候ハ勿論候、右ニ付候而は御首尾合も如何可有之哉と甚以恐入候也、たとへ上之御不為ニ相成候而も自分々々之存念を立候存寄ニ候哉、よもや右様之心得は有之間敷候得共、広キ天下ニ誰有りて尤ニ可存哉、凡天下中ニ君と父母程大切成るものハ無之、何程愚余不埒之者ニ而も此道理ハよく存る事ニ候、右之処心得違ハ有之間敷候得共不弁者も有之哉、此度迺も庄屋をうらみ候所方上之事父母之事迄も相忘れ候と申者ニ而、此度之次第上之御為ニ宜敷不宜敷能々相弁へ可申候、其上父母妻子之為ニ相成可申哉、此頃之次第を考へ候ニ数日之間宿へも戻り不申、野ニ伏し山ニ集り候而雨露ニも相当り品ニ寄り候而ハ一命ニも相拘り候義誠ニ父母妻子之歎キ難計事ニ候、年貢御取<sup>(節)</sup>価多く食物も無之、銘々渴命ニも及候極難渋事起、党を結び候事は世上ニ有之候得共此節銘々渴命ニも及候難儀も有之候哉、たとへ此節御事多候<sup>(虫損)</sup>様之難儀は御見捨ハ無之、御救も可被成下候事ニ候、是迄随分御憐愍之所御恩を忘れ御不為を<sup>(虫損)</sup>候儀歎ヶ歎存念ニハ有之候得共、畢竟不埒成者有之助成講之金子上方ハ御下ヶニ相成候得共庄屋方小前へ不相渡と申唱候者有之、右惑ハされ候而之遺恨と相聞へ候、又各別ニ遺恨ニ不存村々も有之、穩便之心得専ニ致居候而も有之候由之処、家々を焼払、或ハ田地も踏荒し候之様申触し候故、無拋罷出候村之義有之様子ニも相聞候、右等申触し候者共ハ甚不相濟事ニ候、勿論庄屋不筋之儀も有之候ハ、御調へ之上急度可被仰付候、何分是迄之所御首尾ニ懸り候而も過去り候事は致方無之候、銘々右之処後悔致し上之御首尾ニ不相成様ニと色々心を配り候向も追々有之由、是等は誠ニ善心ニ立戻り候と申者ニ而奇特之事ニ有之候、上ニも被為聴し者嘸々御満足可被遊御事候、第一庄屋と不熟ニ而ハ上之御為ニ不相成候庄屋ハ上と下と之間之橋之ことく、村々ニ庄屋無之候而は川ニ橋なく渡し船なきやう成者ニ而御用之差支目前之事候、一旦之処庄屋不埒之様被存候而も家を崩し<sup>(虫損)</sup>家も無之躰ニ相成を見請候ハ、氣ノ毒成る心<sup>(虫損)</sup>□□し候者人たるものゝ、当前ニ有之候、たとへハ人の諸道具等損しさせ候而も輕キ品ニても甚氣ノ毒成事を致し候旨断ニ及候事ニ候、まして家・蔵・諸道具等損し候而も氣ノ毒成事ニ不存候哉、何分ニも右様和熟不存候而ハ上之御為不宜と申処能々相弁へ、是迄之所致方ハ無之、呉々も此後之処穩ニ相成候得は此上之忠義ニ候間、此所相忘れ申間敷候、此上万々一騒々敷義有之候而は誠御首尾合ニ相拘り如何様　公辺方御察当可有之も難計、殊ニ此時節騒々敷有之而ハ上之御不為ハ勿論、此度御引移り被成候越中守様江対し候而も不相濟、追付上使も御着之御時節ニ相成候得は　公儀江対し候而も甚不相濟事ニ候、何分上之御為を致し候へハ矢張越中守様御為ニ相成、自から御憐ミも相増可申道理候、能々心得違無之様可致候、助成講一件之儀ハ何レ近々会も相立可申候、御自□も近寄<sup>(虫損)</sup>り候得ハ御調も無之事忤と存候者も万一可有之哉ニ候得共、決而御捨置は無之候、呉々も可令安心候、此段申聞候之事

未

八月

手元

一桑名御領騒動相鎮り候上、又々寄集候由噂承り驚入候而夫々相尋候処、山村藤之宮・小泉村

長ノ宮、式ヶ所江少々寄合候得共已前之様ニも無之候而、殿様御得替<sup>(所)</sup>ニ付為冥加献上米ニ而も可差上杯之義も候得共御請も無之様子、尤昨廿七日彼近辺迄聞届ニ遣し候処、最早右様之義も無御座、先静謐相見申候、猶亦桑名御重役方此節在々御入込被仰付之筋も有之由慥ニ承り及申候、右之段申上候、以上

庄屋

仁平治

同断

定次郎

未

八月廿八日

一小泉村長ノ宮并赤坂と申野辺ニ而多人数相集り候声相之致し候得共、小泉村之者は勿論外村より一人も出不申、全天狗之所意ニ而も可有之哉、小泉辺ニ而申居候由

一去廿一日桑名御用人奥平織右衛門様・町代官佐藤鳴右衛門殿

縄生村 富田村 羽津村

右之辺江十四五ヶ村ツ、呼出し利解申聞、廻村被致候由、利解は先達而騒動いたし願之趣、尤不致段申聞候由

一騒動之砌小泉辺り宮山伐り荒し候由、右等之義ニ而天狗ヶ様ニハ致し候哉と云居候由

一川島村辺ニ而ハ北方ニ而寄合いたし候様申、北ニ而は南之方ニ而寄合致し候様南北互ニ忝人も寄合無之と噂而已之よし

八月廿八日権四郎方同役江申越し

玉垣村森田源七隠居、巻田磯右衛門方江申参り咄居候趣

去ル十九日員弁郡野辺村役人再崩し笠松御手代御出張

鼻かい村

笠松

庄屋

御支配所

西田平蔵宅江

桑名領大木村方起り当村大和泉村寄集り、同村ニ而笠松御手代御利解、昨廿六日楠六郷江入込候と之噂、楠村庄屋を悪ミ百姓とも彼是申、昨晚津御代官玉垣村泊りニ而今廿七日津御領平尾村へ御出張、今度ハ組子御連無之吟味役兩人、大庄屋忝人

尤白川様江御引渡相済候迄平尾村江御詰候様との御事ニは候得共、今度早々御出役

先達而桑名江御使者中ノ内藤八参り候節、品ニ寄り候得ハ御手当御頼可申と之御事ニ付

御家老 加判奉行

其後桑名より何共不申参候間、矢張御手当之御心得御座候よし

一下箕田村変死有之候付、久居方御代官御出役之処、亦々騒動之趣ニ付同御領大手村江御詰候様との風聞

## 火事装束武器跡を参り候由

八月廿九日

岡本兵右衛門と伊藤十右衛門中田紋兵衛方へ向ヶ申越ス

一桑名領富田辺聞合差遣し候者共昨夜罷帰り承候処、今度之一件御法令相守罪も無之庄屋共被壊、又は迹々難ニ出合候者共三拾人計申合、利非御分ヶ被下候様ニと申願立ニ罷出候由、未罷帰り不申趣、且又村々江廻文相廻り候次第ハ、桑名表役人中代り之面々知らせ之廻状、役中と直ニ相廻り候儀を下方ニは又候再発と相心得候而騒立候村々も有之、又は先頃之風雨ニ而川々出水ニ付損シ候場所江五人拾人程宛防キニ罷出候者を再発ト己相心得罷出候面々も有之、百姓共区々之儀ニ候得共、是以一旦ハ相納り候得共人氣荒立居候事故之儀と奉存候、先達而も申進候通長ノ宮江寄り候義は相違も無御座候趣、大泉村と西ノ<sup>(カ)</sup>口迄引続キ候森故長ノ宮と唱へ候之由御座候、昨日も得御意候通楠村辺は弥無難ニ而、夫と富田辺も同様之次第御座候得は全ク桑名と此筋員弁郡之辺之騒立奉存候、右ニ付引取申候而も宜可有御座哉、可然旨御伺置被下候様仕度奉存候、其御地江も此筋と風聞可申出候得共爰元ニ而承合候処、先書申進次第ニ而御座候間左様御承知可被下候、津・久居出役之儀は爰許ニ而相分不申候、紀州様御鳥見懸は地方之役ニは無之候得共、白子御代官より之御願ニ而三重郡泊り村江代り々々被相詰風聞次第白子役所江日々之注進ニ而御座候、右鳥見中ハ引取不申候、以別紙申進候、本書相認メ差出シ可申と存罷在候処江、今廿九日九ツ時玉垣村庄屋島田又右衛門、此者ハ佐野六大夫家内之兄ニ而親類付立寄り候ニ付相尋候処、此間中津表役所と被申候ニ付、桑名之義手筋ヲ以聞合申出候様被申聞罷越、只今帰り掛之由申候ニ付幸之事と存候間打田助九郎・治兵衛と為相尋候処、御互ニ領主・役人も心配被致候事ニ候得は、私及承候次第御咄し可申上と心能申相咄候次第左ニ申進候

当月十四日

笠松御手代

兩人

桑名代官

小杉武右衛門

星見小十郎

右之面々羽津村庄屋宅江御出張列席ニ而、笠松御手代百姓共呼出し被申候訳ハ、先達而此方共江願之趣聞届遣シ可申と申願書取上置候得共、是式之事ハ御領主江相願可申、万一聞届も無之候ハ、其節可申出と被申候而願書被差戻候間、百姓共返答ニ申候ニハ君子ニ二言なしと申候事も承及候得は一旦御取上被成候而、御聞届不被成候段何分ニも一統承知難仕段及返答候処、桑名役人中も立合候上ニ而申渡し候事ニ候へは御領主江相願、此上ニ而聞済無之候ハ、早々可申出、此節ハ聞届遣シ可申と被申候而願書差戻シ御引取ニ御座候、

当月廿四日

桑名御用人

奥平織右衛門

代官

石沢弥一兵衛

同日羽津村庄屋宅へ出役候而、百姓共惣代四五人村役人附添御呼出しニ而段々御利解之訳は荒増次第左ニ申進候、助成講配分之事彼是申募り候得共、是は此節專御評義最中ニ而いつれ共決定不致評儀相極り候ハ、夫々割渡し可申、先達而聊之事ニ而及騒動百年余も御在城被遊候御領主之御厚恩ヲ忘レ、本来之处申さハ冥加米ニ而も差上御見送しも可申上筈之处、無其儀騒立御上江も御苦勞ヲ掛候次第誠生有者は可及落涙ニも程之御利解ニ而御座候処、夫故村方ニ寄り候而ハ直ニ冥加米御城下江差上候村々も有之候処、其筋々ヲ以差上候様被仰付御受取ハ無之候、其後ヶ点不致村々ハ何となく騒立寄り集りうさ々々申候間、彼是物騒敷相成申候而村毎不残ニ而ハ無御座候、

右之次第ニ付

当月廿六日

津代官

福喜多平<sup>(カ)</sup>駄兵衛

同御領山ノ一色村江相詰被申候

一桑名表是迄相勤罷在郡方之役人之分ハ不残退役被仰付、当時ハ新役人ニ而御座候、右之趣兵大夫宅ニ而玉垣村庄屋島田又右衛門・助九郎・治兵衛江相咄し申候、是<sup>カ</sup>津表江罷越申上候段申候而、引取申候、右又右衛門義は三重郡日野村ニも親類も有之、同村庄屋宅ニ而委細ニ承り<sup>(虫損)</sup>□□帰り候事ニ候得は此儀は相違も無御座候、此段各様<sup>カ</sup>宜様御差繕被仰上可被下候、

八月廿九日

伊藤十右衛門方<sup>カ</sup>中田紋兵衛江向ケ申越ス

以村継致啓上候、然は拙者儀時暮方川島村江致着候、早速騒動之模様及承候之处、御地ニ而承り候も差而相替儀も無御座、□度致候事も無之、昨朝権四郎<sup>カ</sup>同役江向ケ申遣候通之次第、此度南村宮山江寄集り候儀不慎様之問合も有之候得共、八王子村庄屋方ニ而承り合候ニハ少々百姓共寄会候ニハ相違無之由、区々成義ニ而何レ欺実説とも難申、乍然当時何れの村方も穩ニ鎮り居候趣ニ候、八王子村は外三ヶ村申合、当廿六日祭礼等致候由、左候得は最早穩ニ相成申候ニは相違無之と奉存、壊れ申候庄屋共不残桑名表江愁訴ニ罷出居、不壊庄屋は皆々宅ニは居不申留守之由を申、他<sup>(方々)</sup>参り候者ニハ対面不致候旁故、問合も庄屋江手寄り無之候ハ出来不申由ニ而<sup>(儘カ)</sup>慎成問合出来不申趣ニ御座候、今日は北小松村庄屋、是者桑名御領庄屋并所々親類有之由ニ而此者へ問合ニ申付候、

津御領

一西野村庄屋・村目付兼役、是ハ当村庄屋親類之由、是ニ而津方へ注進致遣し候書付写取差出



候ニ付別紙差立申候、猶又八王子村役人江聞合是又差立申候、右両通御差出し可被下候、先今朝迄慥成義不及承候、後日相替儀御座候ハ、早速貴様向ケ可得御意候、

八月廿七日西野村役人共ニ而聞合

一桑名領騒敷儀聞合仕候処、品々風聞御座候得共慥成義は一切無御座候、猶又小泉村長宮并大井田村近所赤坂と申所江大勢寄集居候様取沙汰仕候由ニ付、其近村方見及参り候得は一向人寄之場所も無之由、尚又右場所江参居候村方も無之由ニ付何れ之村々も不審ニ存居候風聞御座候、唯々此節ハ天狗之正意ニも可有之哉ニ風聞仕候、

一去ル廿一日方桑名御用人奥平織右衛門様・町代官佐藤鳴右衛門様兩人

縄生村 富田村 羽津村

右村々江拾四五ヶ村ツ、呼出し、但頭百姓江役人付添之由ニ而御座候、右之通御呼出シ被成往々御利解、尚御達之趣聞取候通り左ニ申上候、

一先日ハ百姓共心得違騒動仕候段、対 御上江不屈沙汰之限りニ候、先達而ハ町郷中共殿様御永城之儀 公儀江願出、甚神妙之段御満足ニ被思召、然ル処此度騒動いたし候儀殿様ニも甚心外ニ被思召候、乍去不被為是非候、爾来相慎ミ取締り可申候、助成講之儀壱口ニ付金四両三分ニ破講ニ可相成所、御上も無抛御入用有之ニ付三両三分ニ而算当立有之处相違無之間此旨可相心得候、右之通り之事故代官・庄屋之上聊も引負之筋ハ無之間此旨会得可致候、其外願筋之儀は一ヶ条として筋立候儀は無之ニ付、御上ニハ御取上無之間此段承知可致候、猶又庄屋退役願之儀ハ相叶不申候間此旨承知可致候、猶克相弁可申 殿様ニハ御家中夫々御役人ヲ以御改事御取扱被為任、郷中ニテハ代官・庄屋ヲ以取締り被為成候事ニ御座候、尚又庄屋身上之儀ハ先達而御改格以来能御取締り候間此旨承知可致候、たとへて申候得ハ海川も舟橋無之候ハ而ハ通路出来不申、左候ヘハ一村之儀ハ庄屋へ御預ケ被成置候得ハ村方ニ而も庄屋橋無之候而ハ通路出来不申哉、御上連も庄屋之橋無之候而ハ御改事向之通達最通り付不申候之儀ニ候得ハ、今以役儀取上ケ候事出来不申、乍去村方ニより庄屋之上不筋之取計有之候事ニ候ハ、隣村之庄屋江向、其趣可申出、左候得ハ其品糺之上取計可申旨被仰渡候由ニ御座候、

右之通り最寄村々江御立入御利解之御達し被成候処、百姓共一々納得仕御利解<sup>(威)</sup>威服仕候事哉、壱番ニ萱生村・中村百姓共為御冥加米貳俵差上候処、御満足ニ被為思召候、鳥目五貫文為御褒美被下候由、右ニ付二番ニ豊田村も右同断米貳俵差上候処、御役所ニ而被仰聞候ハ庄屋相談之上差上候事哉ニ御尋有之所、百姓共其儀無之旨申上候処、庄屋談候之上なれハ相納可申候得共左も無之候ハ、先預り可申談候上、沙汰可致と御下知有之由ニ候得共、百姓共も跡方庄屋へ談しも如何ニ存談し不申、其儘致置候ニ付役所方貳俵之米御戻し被成候由ニ御座候、前段之萱生村も庄屋へ談し不申由ニ候得共最初之事故取あへず御納メ被成候由ニ御座候、尚又乗坂村も庄屋・百姓相談之上鳥目貳拾貫文差上候之処決談出来候由ニ御座候

川島村庄屋

未八月廿八日

定治郎

覚

一八王子村役人中江聞合左ニ申上候

一又々騒ヶ敷及御聞被成候得共為差儀は無之、大泉村長ノ宮・山村藤ノ宮江去ル廿日頃寄集り候訳ハ落文を致し候哉、追々近村寄集り候得共誰申出シ候共無之何事を申者も無之落文致し候ものも無之、無詮義と皆々引取申候、右を聞付追々出懸ヶ候村方も有之候得共何之談しも無之追々引返し候由全ク狐狸・天狗之所為之様ニも被存候

一第一此節騒ヶ敷ハ村々庄屋桑領江詰掛、私共横道之儀も無之ニ家ハ被壊米穀ハ蒔散し衣類ハ破捨、今日住居可仕手段無之間御制道奉願候所、右取上ヶ普請等為致候得は百姓共騒立可申、其方共申事も尤也、然共御評儀決着不致相鎮り候様御利解被仰聞候処、此儀御取上ヶ無之ハ出訴可仕段強而申候、依之代官格之庄屋五六人江其方ヲ利解可申段被 仰渡相談申掛候処、御手前方之内ニハ不被壊住居無障安心之御方も有之、我々ハ雨露之凌キ方も無之、今日たべ候ものも無之、乞食可仕外なし、乞食致すなれハ江戸へ罷越可致と申、中々聞入不申少々取繕ニ掛り候村々手伝ニ出候者は八分ニ相成、庄屋江ハ見舞候ものも無之、是ニ而ハ一寸之分も出来不申段申上候所、段々御利解ニ而先々桑名ハ引払候得共何れも庄屋共手強申立相鎮り不申、只今ハ庄屋共騒ニ御座候、併庄屋之内ニも区々有之候、然ル処廿二日ヲ追々御出立ニ付御混雜ニ而早速評儀も難付 公儀江差出し候而ハ御外聞ニも有之旁以庄屋ヲ差押へ有之候、如何可相成哉不安心ニ御座候、日野谷ハ差而騒敷儀ハ無之北筋之儀ニ有之候

一此頃羽津村江惣代ニ而御呼出し御利解有之罷出候ものハ感服致帰り候得共、村中不得心ニ御座候由

右之趣ハ内々被致置候様申聞候得共承り候儘荒々如此ニ候

庄屋

八月

仁平治

同断

定治郎

覚

川島村

一桑名領分聞合之義今日津領西野村小目付坂倉弥左衛門と申者、此間北筋江聞合旁御宿懸ニ参り候由ニ付右承りニ遣し候処、南大社村始奥筋篠立村迄参り、夫々石狩村・丹生川・田口村・小島村・保々辺迄一門聞合候得共何之相替義も無御座、先一統穩ニ相鎮り居候様ニ承り帰り候ニ付、此段申上候、以上

庄屋

未九月五日

定次郎

津御領小目付坂倉弥左衛門并森田七三郎と津御役所江注進口上書、大庄屋森田源七方ニ而内々借候而写取

坂倉弥左衛門と口上書之写

去ル朔日と桑名領員并郡奥筋村々止宿懸ケニ打廻り聞合仕候村々左ニ申上候、朝明郡小牧、員弁郡南小社・北小社・梅戸・大井田・小泉・一色・金井・高柳・片樋・麻生田・阿下木・口・川合・下平・広瀬・市場・本郷・西野尻・東野尻・山口・篠立・鞍平新田・南中津原・市ノ原、右四ヶ村は篠立隣村ニ而方角北江当り美濃境山手ニ御座候、右四ヶ村篠立村ニ而聞合申候帰り懸、坂本・大垣内・石川・東善寺・石狩三ヶ村、丹生川二ヶ村、平塚、朝明郡田口新田・田口・田光・小島・保々・中野、右村々聞合仕候処、当時何之騒敷儀も無御座候、勿論助成講は壱口ニ付三両三步ツ、御下ヶ可被下旨笠松御役人様被申渡候ニ付金子下り候得は子細無之趣相守申候、尚又先達而騒動発り候模様承糺候処、員弁郡奥筋ニ而は下筋村々と押懸参り候ニ付、無抛罷出候趣ニ相聞申候、朝明郡ニ而は員弁郡奥筋村々之者共ニ手強申立候者も有之哉ニ申候得共、員弁奥筋之者ニ承候得は此度之騒動ニ付頭取と申者は無之由ニ候得共、石狩村之者共最初桑名役所江出願之節五六人も桑名御役所江御召捕ニ相成候処、去月十日早朝右之者共御差免シ相鎮候様被申渡御免ニ相成候之處、果而十日ニは騒動鎮申候、左候得は頭取無之と申候得共右之處相考候而は如何之様ニ存候旨前々御座候、山口村之者は密々咄仕候、右村は桑名と七里余上員弁郡奥ニ御座候、尚又篠立・古田、右両村は美濃境方角乾ニ当り申候、右村と美濃之土岐村迄三拾丁余り有之候、桑名江は八里余御座候由、右村ニ而多度郡美濃境山中村々之様子聞合仕候処、何之子細も無之鎮り居候趣相聞申候、且又村々奥方之様子見及候処、此節は早稲方取入最中故百姓共大躰は刈取ニ罷出居申候、尚又先達而色々虚言同様之風聞も御座候得共、此節彼是之取沙汰も無御座候、先ツ一統穩之様子ニ相聞申候、且又此節之儀故三人と寄集り居候得は御召捕被成候趣ニ而同心衆忍姿ニ而打廻候有之趣ニ風聞御座候

一先達而御訴申上候小泉村長宮并赤坂と申所江騒動後寄集り候風聞有之、其節御注進申上候、此度右場所も及見聞合候処何之子細も無御座形合も無之趣ニ相聞申候、尤山村藤之森江騒動鎮後近村之者四五十人も寄集居候ニ付、町奉行罷出張候ニ付引取申候由ニ御座候、其後何れ江も寄集居候も有之趣承合申候、且又福尾山代払之儀聞糺候処、此義は全虚説ニ御座候

一先達而笠松御役人御廻り在被成、助成講一件御申渡有之、其跡桑名御用人奥平織右衛門様御廻在書付を以御利解被成候後、何之被仰出も無之趣ニ相聞申候、

一庄屋共助成講之義ニ付聊も引込筋無之趣ニ付、去月下旬庄屋共桑名役人江不殘罷出、此度助成講御割戻シ金之儀ニ付庄屋引込有之様小前之者共疑心仕居宅ヲ被壊候、世間ニ而は庄屋は盜賊同様と申立候而心外存候間、何分諸帳面御調被下糺明被成下候様御用人御役所江願出候之處、追而糺明可致候得共此節は何角混雜致居候間、先々差扣呉候様御用人様と品々御利解被成候ニ付無抛納得ニ而引取候様子ニ相聞候、

一此度騒動之儀ニ付御調一件、公儀江一々御窺被成候事故に今何之御沙汰も無之趣ニ相聞候得共、大方九月中旬頃ニは右御調御政事向も可被仰付哉、猶又公儀御役人様方并下総守様御役人御立会之御吟味にも可相成哉、此儀も 公儀江御窺中之様子に相聞申候、此節は日々御家中様方御出立ニ而混雜之様子ニ御座候、尚又越中守様御家中も両三人、桑名表江去月廿九日頃御着被成候風聞も御座候

一桑名領之儀桑名郡村々は越中守様附、朝明郡并員弁郡は下総守様附ニ而、三重郡楠六ヶ村日野谷四ヶ村は一橋様御預りニ而信楽之御支配被成候様江戸桑名御屋敷ニ而噂有之趣ニ風聞承り申候、

右之通承合申候、何れ之村々も当時は静謐ニ治り居申候、此上騒動御吟味之模様并御政事向御取扱之品々方変事と難計御座候得共、小前之者は助成講金子下り候得は故障無之趣ニも相聞申候、右之次第第二候得は金子下り候ハ、子細無之儀と奉存候、

右之通之儀ニ付此段御注進申上候、乍憚御役所向宜被仰上可被下候、已上

九月四日

坂倉

太田公

阿部公

福喜多公

口上之覚

玉垣村無足人

森田七三郎

去ル廿七日方

桑名御領方村々聞合之趣左之通ニ御座候

一発端は助成講、去ル酉年霜月相初り来ル酉年ニ至満会ニ及ひ可申仕法ニ而、年々式会ツ、五千口壺口ニ付掛金壹歩ツ、圖引拾六口江落口五拾両ツ、相渡シ取退、酉年満会ニは壺口懸込元金六両ツ、割戻シ相済候仕法之所、每年会毎ニ仕法之通圖十六本ツ、之处仕合候者ハ相形付候ニ付、夫方三十式本ニ仕法相替候、式拾五両渡シ相成去午霜月会迄右之振合ニ候処、今度御国替ニ付中途に満会ニ相成候割戻シ四両三步ツ、可相渡候間、右懸り郷代官水谷佐太郎殿先達而村々百姓小前江申渡有之、此段百姓共銘々能承知致罷在候所、其後佐太郎殿方江助成講掛り庄屋

六郡之内壺郡式人ツ、

拾式人

呼寄、割戻シ金四両二歩之所三両三步ならてハ可相渡金子無之候間、此段村々百姓方江可申達旨被相達候ニ付、右は先達而直達之節四両三步と被申渡候を今以庄屋手前方三両三步之由聞候共納得仕間敷候間、今一応直達達之候様申立候得共佐太郎殿承引無之候ニ付、無是非其

段百姓方江申聞候処渡金壹両相違ニ付会得不仕人氣立候ニ付、其次第佐太郎殿江申立候得共一向取敢無之再応申立人氣立、全懸り庄屋共掠取候ニ而可有之と百姓一派相疑必定騒動ニ可及勢ひニ候間、是非今一応直達御座候様種々申立候得共一円承引無之、人氣騒敷段全ク庄屋共無実之申分ニ而上ヲおとし候義と佐太郎殿被相心得候躰ニ而、百姓共騒立家居等汚候様之儀候ハ、直ニ鰐元ヲくつろげ相持可申、何之取敢も無之百姓方弥以疑心増長日々騒々敷相成、石狩・中村・丹生川・大泉辺方打壊初メ終ニ大騒動ニ相成候由ニ御座候、

## 一騒動御笠松御役所

桑名筋  
員弁郡 筋江

近野延右衛門殿  
山本長次郎殿

公料

花かい村金右衛門付添

三重郡  
朝明郡 筋江

大場瀬左衛門殿  
村田道四郎殿

公料

花飼村  
西田平蔵付添

村々巡在割戻シ金庄屋役人等私曲之儀無之、中途ニ而満会ニ相成候故、三両三步割戻シ之段相分り居候条此段会得候様、猶又社倉米・積米之儀両様共郷代官・村役人等私曲之段申立候得共、右両様共下方飢歲御救御手当ニ而、郷方方御領主江差上候物ニ而其砌両度御礼之御酒被下在之上ハ指上切之事ニ而、下方方彼是可申筋ニは無之候、山田新田等之向改在之候処、右を白川様江御本地ニ相成御引渡ニ而は難渋之旨願在之候得共、是以今度御引渡ニ付而は敵数等御改新田ニ而御引渡ニ可相成は定之事候を何之弁も無之申立候は心得違之事ニ候、庄屋役之儀已後村方廻り<sup>(虫損)</sup>□□成<sup>(虫損)</sup>□様願ニ候、是又左様相成候而は村々取締も出来不申差支多クニ付難取上候、右条々夫々会得仕可申如斯申渡候上、又候騒動候ハ、公儀江弓を引と申者ニ付騒立候者者共ハ悉ク御仕置首無之候間聊心得違不申様御達之处、間々気強ク百姓共進出候而、先達而町屋川原ニおゐて願之趣夫々聞届ケ可申旨被 仰聞百姓共引取候ニ一ヶ条も御聞届ケ無之段御役所之偽ニ候、何共難得其意旨強ク申立候処、此段以之外心得違候、願之趣条々委細聞届候而御領主江申通候ヲ聞届と申ニ有之、願通相叶遣シ候を聞済と申ニ有之候、申立候条々を聞届候を其方ニおゐてハ聞済候ト心得違候ニ而在之候、猶又先達而頭取等相調候ニ不及旨申達候処、助成講掛り合無之村々庄屋宅等悉ク相壊候段何之謂も無之重々不届之

- 致方ニ付御領主<sup>(虫損)</sup>と御札等も可有之候間、此段相心得可申旨被仰聞、百姓共納得ニハ無之跡ニ相見江候へ共相<sup>(虫損)</sup>ミ候者共も無之それなりニ事分り相成候由ニ御座候
- 一社倉米と申者先年御上<sup>(虫損)</sup>と五千俵、村々小前<sup>(虫損)</sup>と五千俵差出シ都合壹万俵、御上ニ而積立御座候之由、積米と申ハ町方<sup>(虫損)</sup>と五千俵、郷中<sup>(虫損)</sup>と五千俵都合壹万俵、是又御上ニ而積立有之、右両様下方<sup>(虫損)</sup>と差上候節御酒被下候而差上切之米ニ御座候由相聞申候
- 一去ル廿三日頃夜中員弁郡大井田川原ニおゐて酒狂人式人螺吹立候ニ付、其近辺村々騒動再発と相恐騒々敷村々<sup>(虫損)</sup>と見届ニ参候所、全ク酒狂人之所為ニ而大勢寄集り候儀は無御座候由、此砌種々雑説在之何れの村方も道具等相形付候由ニ御座候
- 一去ル廿四日<sup>(虫損)</sup>と御用人奥平織右衛門様御巡在有之、所々ニおゐて拾四五ヶ村ツ、一村五六人ツ、呼寄、割戻シ金三両三步下ケ候旨已後騒立候義無之様利解被 仰諭候所、村々共会得仕疑惑も過半は辞候様子ニ相聞申候御巡在相済、廿七日夜桑名江御引取之由ニ御座候
- 一桑名郡村々<sup>(虫損)</sup>と一村新米式三俵ツ、為御餞別米差上、員弁郡・朝明郡村々同様為御冥加米差上、いづれも小紙織りニ

御冥加米 何村

御餞別米 何村

右之通書記、去ル廿七日已来追々ニ桑名御城内ニ持運び申候、是迄御郷中<sup>(虫損)</sup>とハ会所江右等之品は差出御代官江相渡候仕来之所、此度御勘定所江直ニ差上候由ニ御座候、区々説は御座候得共当時寄集り居り候所も無之、人氣も追々鎮り候様子ニ相聞、此上騒立出儀ハ有之間敷由ニ御座候、

一去ル十八日

御庶子

利三郎様

由丸様

江戸表江御出立被為在候由ニ御座候

一同日已来追々御家中御出立之分

御家老	山田典膳様	御番頭	奥平亀之助様
御用人	原田厚右衛門様	町御奉行	萩野半右衛門様
郡御奉行	足助軍平様	御寄合	竹下七郎右衛門様
御馬廻り	斉藤甚兵衛様	御用人	松井孫平様
御勘定	萩田斧右衛門様		御代官役二人
	御普請方式人		町組式拾人
	在組式拾人		

右之通御出立ニ御座候由

山田半右衛門様

蟄居御免御用御勤候様被 仰付

長坂幾右衛門様

郡御奉行被 仰付候由ニ御座候

一来月廿八日御城御引渡ニ付

御家老 山田内膳様 御用人 土方尉右衛門様

御用人 奥平織右衛門様 町御奉行 若林弥三兵衛様

郡御奉行 和田孫平様

右外御番頭・御物頭・御馬廻并小役人衆三拾人程御居残り之由ニ御座候

津御代官

太田孫平様

阿部庄五郎様

福喜多平駄兵衛様

小目付

坂倉弥左衛門

是ハ三重郡西野村ニ而庄屋役は相勤不申、目付役計リニ御座候

右之通御座候、已上

未

九月

豊田多賀助

乍恐奉願上候御事

一此度御領分御百姓共一統徒党いたし私共居宅、其外建物并諸道具等迄被打壊候族も御座候、右は何等之訳合ニ而候哉相分り不申候、相考候之处御所替被為蒙 仰付候ニ付、御上様被 仰出候御用向等夫々迄具ニ申聞置候得共、全ク御百姓共疑心相立候儀と奉存候、併可願趣意之儀私共迄申出、論判仕候上にて右騒立候儀ニ御座候ハ無是非儀御座候得共、何等之沙汰も不仕理不尽ニ取懸り候義御座候、尤仲間共之内無難ニ罷在候者も御座候、是等は御防ニ而相逃候得共、庄屋之儀一軒も不残壊し候由ニ申唱候得共世上一統悪名相立、此儘ニ而誠ニ立所も無御座必至難渋心外奉存候間、右始末明白ニ相分り身分相立候様御糺被成下度奉願上候、御時節柄之儀故少事之儀ニ候は聊御苦勞奉懸候所存は無御座候得共、誠ニ住家も無之必至難渋仕候儀ニ付何卒以御憐愍幾重ニも明白相分り身分相立候様一統奉願上候、以上

三重郡筋

村々

庄屋共

同郡

東富田村

羽津村

肝煎

御代官所

御請書

一昨日惣代御呼出し被仰付候御利解之趣ハ此度大変之儀被為捨置候儀は決而無御座、乍恐当御領主様ニ而御取調被成下置明白相分り此儘ニ而は外様江御引渡しニ相成不申趣被 仰下一統難有奉存候、乍然御利解之上押而申上候段、奉恐入候得共乍恐此節之人氣故御吟味御手延ニ相成候而は又候再発も難計一同不心成候間、何卒右之段乍恐御賢察被成下置候上、急々御取懸りも被下置候は一統難有可奉存候、以上

桑名南北

村々庄屋共

員弁

村々庄屋共

朝明

村々庄屋共

三重

村々庄屋共

御代官所

謝辞

「桑名百姓騒動風説書」の翻刻にあたり、所蔵者および仲介の労を取り持ってくださいました方々にこの場をかりて御礼申し上げます。

(Japanese Legal History, 日本法制史)